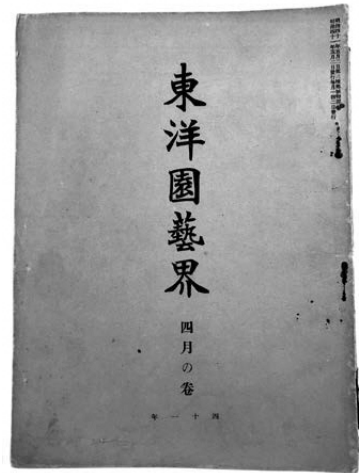


【収藏品紹介】  
『東洋園芸界』（創刊号、明治41年）

『東洋園芸界』41年4月の巻「創刊号」  
(東洋園芸会、明治41年5月)



今回はその創刊号をもとに、これまで知られていない東洋園芸会の発会の目的や特徴について紹介したいと思います。

東洋園芸会は、明治41年3月7・8日に東京鷺谷の料亭・伊香保楼において開催された「第一回盆栽花卉陳列会」をもって発足しました(画像①)。会の事務所と『東洋園芸界』の発行人・発行所は当時、東京千駄木にあった清大園が務めており、後に大宮盆栽村を創設する清水利太郎が中心的な役割を担っていました。

発会の目的については、創刊号掲載の「発刊の辞」に「盆栽の普及発達を図り、山草の栽培を研究し、外国草花の移植を講究するなど、これが私たちの進むべき径路である」と端的に表現されているように、盆栽をはじめとした「園芸」の普及と研究を目的とする点は、明治39年に発足した盆栽同好会と同じですが

(本誌2020年8月号参照)、東洋園芸会では「園芸」を切り口として「外国」へと視線が向けられている点に大きな特徴があります。この点は巻末の「東洋園芸会趣意書」にも「博く典雅なる盆栽の趣味を普及し、山草野草の栽培を究め、進みては外国の草花まで移し植ゆる術を講じ、興味ある談話に花を咲かせ、種子の交換にその技を競ひ、博く同好の趣味に訴へ進みては、海外の国人までもこれらの趣味を理解せしめむとす」とあり、海外への普及が強く意識されていたことがわかります。

こうした発会の背景には、日本政府による「日本大博覧会」計画の存在が指摘できます。これは明治37、38年の日露戦争の戦勝を記念した「万博」開催の建議を契機として、明治40年に政府が計画した博覧会で、来る明治45年4月から10月に予定されていました。計画や趣旨は各国大公使などを通じて諸外国に通知されるなど、事実上の「万国博覧会」として計画されていました。予算の問題などで5年間延期された後に中止となりました。

創刊号には発刊を祝した3名の「祝

辞・祝文」が掲載されていますが(画像②参照)、そのうち筆頭の「日本大博覧会会長」の金子堅太郎(農商務相などを歴任。当時は枢密顧問官)は「新たに『東洋園芸界』を発刊し益々園芸の進歩を促し、以て明治四十五年の日本大博覧会の開設を期し、大に本邦園芸の光彩を中外に発揚せられむとす」と述べています。

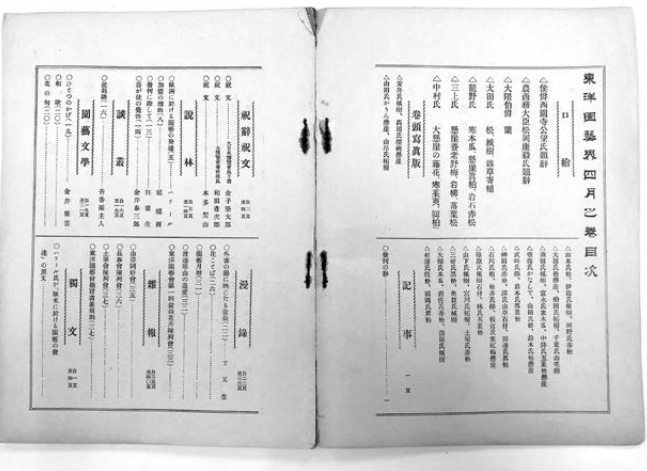
また「東洋園芸会趣意書」には「かくてわれらはここに此の会をむすび、世の同志を糾合して共にこれが研究と普及を図らむとす、来るべき大博覧会は將にこれが試金石たらしむべく最好機会ならすや」と、発会の先に「日本大博覧会」の開催を見据えていたことがわかります。口絵には、時の首相であり、「日本大博

覧会」計画を決定した西園寺公望と同内閣の農商務相・松岡康毅が発刊を祝した題字を寄せています。西園寺は盆栽愛好家でもあります。松岡や金子なども含めて彼ら政治家が前面に登場している点に、「大日本博覧会」計画との関係が明瞭に示されていると言えるでしょう。この点で、明治39年発足の盆栽同好会とは、その目的や成立事情が大きく異なることが指摘できると思います。

こうした点は誌面にも表れています。



画像① 第1回盆栽花卉陳列会に出品された大隈重信の「蘭」



画像② 創刊号の目次

創刊号の構成は「説林」・「談叢」・「園芸文学」・「漫録」など多彩な記事で構成されていますが(画像②参照)、このうち「説林」では、当時、陸軍大学校や早稲田大学の教員であったドイツ人「ハリール」氏の「欧州における園芸の発達」が掲載され、あわせて原文も載っています。また「漫録」では「外客の眼に映じたる盆栽」と題して、ハリール氏が第一回陳列会を観覧した際の記事が掲載されており、「日本独特の盆栽が外客の眼に如何に映じたるか」という観点からハリール氏の「観察談」が紹介されています。「欧州」の園芸事情への関心とともに、日本の園芸(盆栽)が海外からどのように見られているのか、掲載記事の中からも外国、とりわけ西洋諸国への意識と視線を読み取ることができます。

このように見てくると、「東洋」を冠したこの会には、日露戦争を経て「西洋」の列強と肩を並べようとしていた当時の日本の社会や時代が色濃く反映されていることがわかります。『東洋園芸界』は「明治40年代」という時代が生んだ雑誌だったのです。